

特集

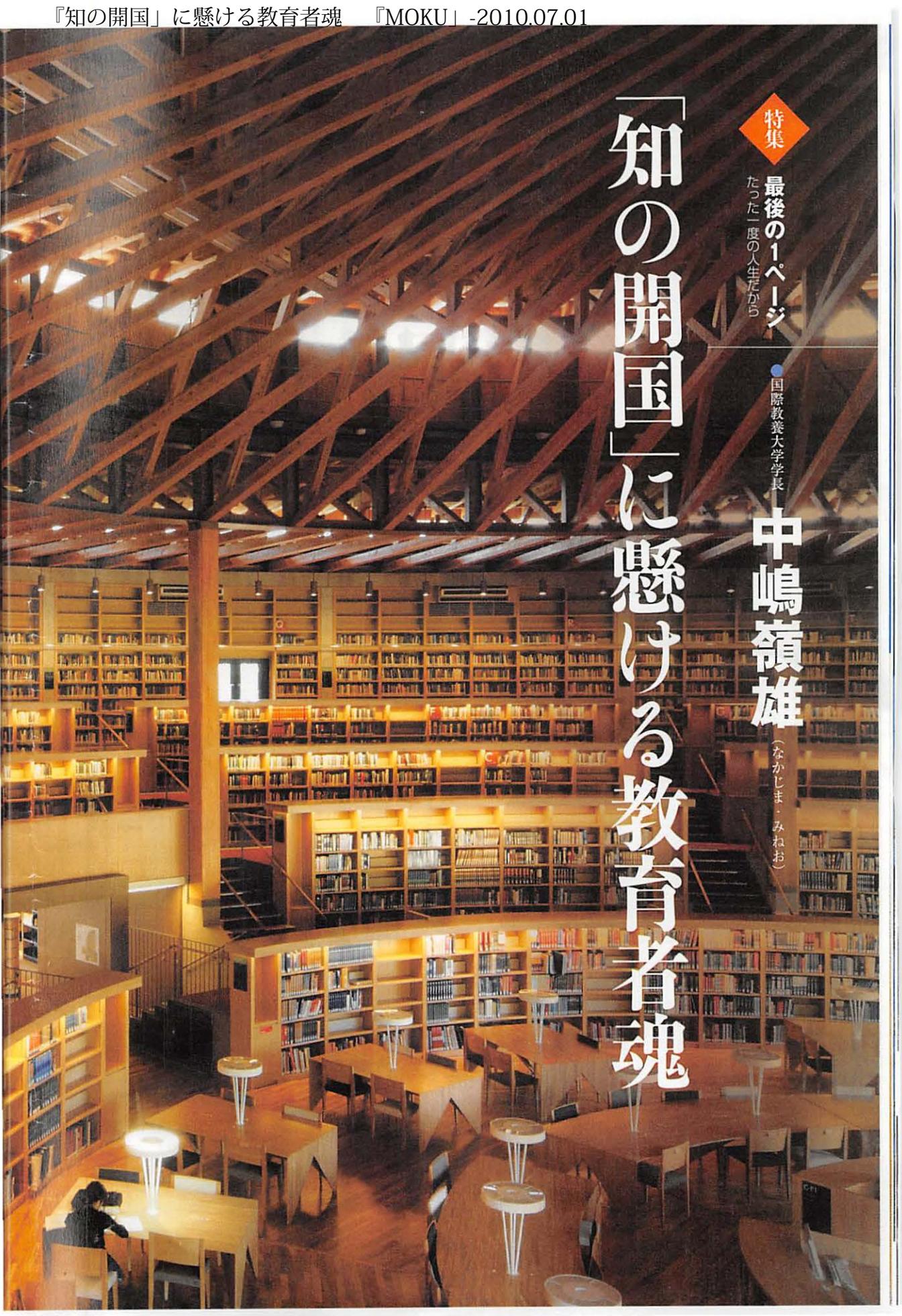
最後の1ページ  
たった一度の人生だから

●国際教養大学学長

中嶋嶺雄

(なかじま・みねお)

# 「知の開国」に懸ける教育者魂



秋田県の郊外、人家もまばらな秋田杉の木立の中に、その大学はあった。

入試の難易度は、国立大学の医学部と同レベル。

開学わずか七年目にして日本企業の採用担当者が注目する公立大学法人・国際教養大学である。

この大学で学んだ学生たちが身につけた語学力、それを使ったコミュニケーション力、そして異文化の中で自分の存在意義を認識できる国際教養の高さ、に教育関係者も一目置く。即戦力として世界を舞台に活躍している卒業生も少なくない。

そうした人材を育成できる背景は、これまでの日本の大学にはなかったユニークな制度やカリキュラムにある。

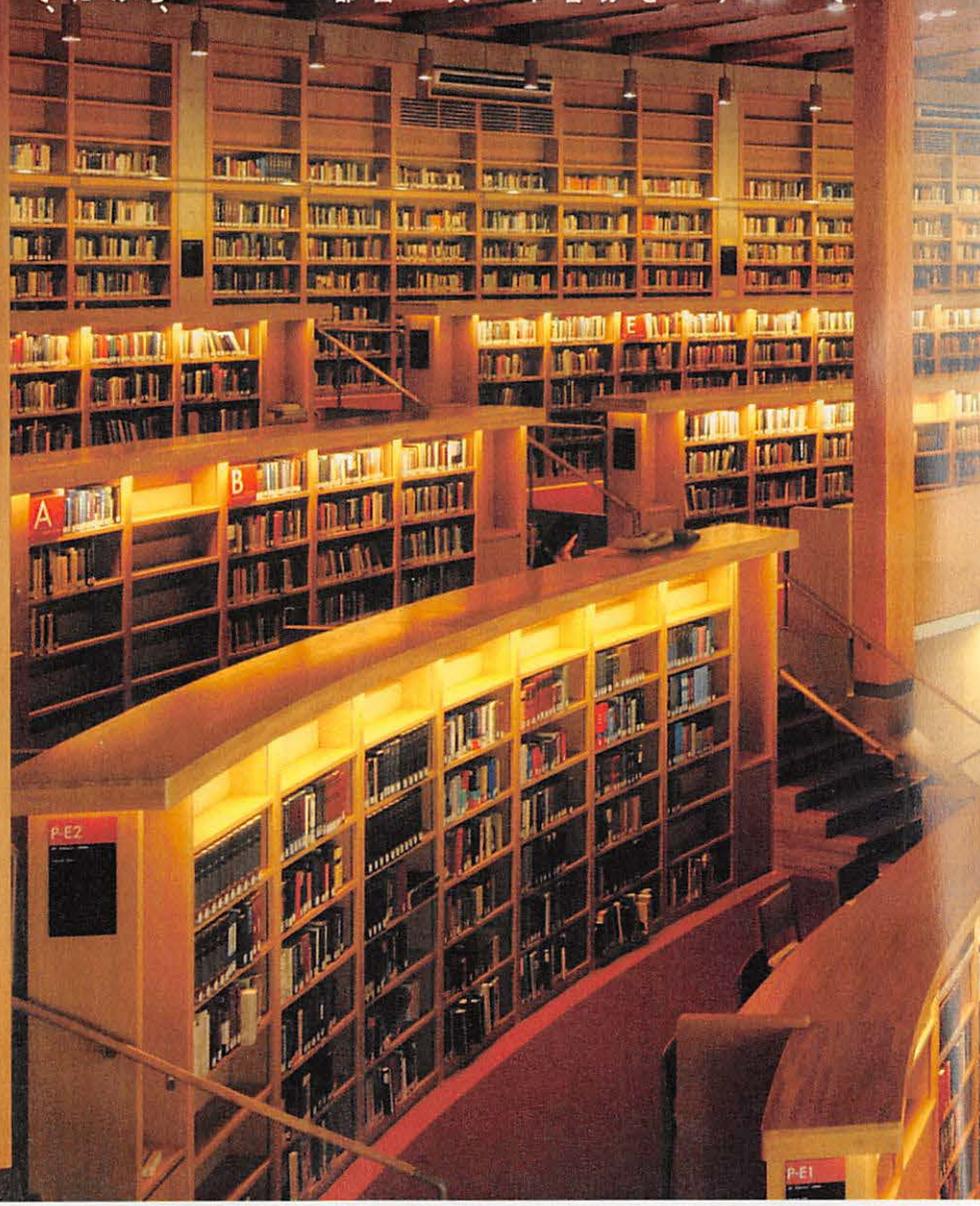
授業はすべて英語、一年間の海外留学の義務、多くの留学生が集うキャンパス、新入生と留学生の一年間の相部屋寮生活、AO入試制度（人物を見極めて合否を決定）の採用など、意欲ある学生には待ち望んだ環境が整う。

この新しい大学像を設立前からイメージしていたのが、理事長も兼任する中嶋嶺雄学長である。

国際社会学者として世界の国々の人材育成に関心を持ち、海外でも教鞭を執り、国立大学の学長も経験した。そのうえで、日本の大学が「知の鎖国」に陥っている現状に危機感を抱き、「教育者人生の最後を懸ける場所」として、秋田県や有識者とともに国際教養大学を船出させた。

学問への貪欲な姿勢を持ち、吉田松陰や勝海舟のような世界に目を向ける志士たちを育てた同郷の先達、佐久間象山にその姿は重なる。

日本に「知の開国」をもたらすために大学変革に懸けた中嶋学長の『The Soul of Education』とは何か――。





## 日本の外に出れば そこは英語の世界

学長室を出て一分歩くと、ミズバシヨウが群生する場所があります。その森を抜けていく散歩道が、私の癒しの場所になっています。

「なぜ秋田にインターナショナルな大学を？」と思われる方もあるようですが、アメリカなどは、大都市から飛行機で一時間ほどのところに落ち着いた大学町があるのは珍しくありません。秋田空港は羽田から一時間ほどで、空港から大学までも車で十分ほどですから、秋田であることの不利益など何もありません。逆に、恵まれた教育環境だとさえ思っています。

学生たちも主体的に学ぼうと思えば、あらゆることが可能な設備が整っています。二十四時間オープンな図書館や言語異文化学習センター（自主学習ルーム）。それ以前に、全体の一割を超える留学生と、教員の半数を占める外国人。授業はもちろん学内の会議はすべて英語という異文化コミュニケーションの環境。そういう意味では、ハードもソフトも外国語習得を容易にする日本一の環境が整備されていると言つていいでしょう。英語に

よる学生同士、学生と教員の会話も学内を歩いていただければ、あちこちで見られます。

英語でのコミュニケーションにこだわるのは、皆さんがご存じのとおり、日本から一歩外に出れば、そこは英語の世界だからです。つまり、英語というコミュニケーション・ツールを使いこなすことで生き抜いていける世界が日本の外側に存在しているという現実があるのです。にもかかわらず、何年間も学校で学びながら、このコミュニケーション・ツールを使いこなせないという、もう一つの現実。これが問題なのです。

以前から、日本の外国語教育、特にコミュニケーション教育が劣っていることを痛感していました。外国語の習得方法に原因があることも分かっていました。そこを根本的に変えない限り日本の外国語教育は変わりません。学んだ英語が使えないのは、個人にとつただけでなく日本にとつても大きな損失です。国の力は、何もGDPの数値だけではありません。英語力も大きな要素です。現実的なこととして、英語が世界的に最も力のある言語である以上、英語での発信力・受信力を持つことがこれからの若者にとつては非常に重要になってきます。



日本の場合、大学の英語教師のほとんどが文法学者か言語学者か文学者です。で、文法的なテキストや語学的なテキスト、あるいは英米文学のテキストでの授業がほとんどです。うまく訳すことができれば単位が得られる、という仕組みになっています。これでは、作品を読むことはできません。コミュニケーションはできません。BBCやCNNなどの放送が理解でき英字新聞が読めて、その話題について教師と学生が英語で議論できるようなカリキュラムが必要です。国際教養大学では、英語の映画を教材に議論する授業もありますし、学生が自分で選んで勉強できるようにたくさんのCDやDVD、視聴覚教材も揃えています。

コミュニケーションも思考も幅が広がると、新しい世界が自分の中に広がってくるんです。狭い思考や価値観から脱して、若者が生きていくうえで非常に頼りになるものが生まれてくる。一度限りの人生を、より充実したものにできる。言い換えると、母語以外の言語を学ぶことは、国際教養を身につけることでもあるんです。複言語学習によって、自分の考えをさまざまな角度から捉えなおすことができるのが、まず英語教育にこだわる理由です。そのため、大学名には地名を

付けるのが一般的ですが、私たちは「国際教養」という教育理念を大学名に付けたわけです。

### 教養教育(リベラル・アーツ)こそ 知の土台となるべきもの

外国語を学ぶと日本語がおろそかになる、という意見がありますが、日本語を大事にすることと外国語を学ぶことは、決して矛盾しません。いま、日本人は言語感覚や言葉そのものへの理解度が落ちていくという自覚を持つべきで、国語の時間数を増やせば国語力が上がると単純に考えることの危険性こそ認識しなければなりません。

教養教育(リベラル・アーツ)とは、個性的な自己発見プロセスであるとも言えます。しかも、国際教養を身につける過程では、自分の経験が基本となつて、そこにさまざまな事柄が論証され、批判的な思考も加味されて培われていくので、おのずと自分のそれまでの視点が開かれていきます。本学では、安全保障や予防外交論、人口学といった他の大学にはあまり見られない授業科目を通して、「歴史と未来」という観点から現代に目を向けさせることも、国際教養のひとつと捉



えています。歴史とは、「現在と過去との対話によって未来を構築すること」だと私は考えます。受験にはあまり関係ないからと近現代史を疎かにするために、未来を構築する思考方法が持てなくなっていくのです。

総じて、日本の大学はリベラル・アーツから離れていく傾向にあります。就職のための技能や資格の取得が大学の目的と化しているような気さえします。知の土台となるリベラル・アーツをないがしろにしてきたことが、日本の教育の大きな問題点だという気がしてなりません。これは、教育関係者が少なからず実感しているはずなのですが、教養を身につけさせる具体的な方法が分からないのだろうと思います。

文系の本学において、数学はもちろん、生物実験、化学実験、物理実験などの自然科学の授業も行うのは、文系・理系のどちらかの枠に囚われることのないリベラル・アーツを身につけるためです。スズキ・メソッドを用いた室内楽アンサンブルの授業もあります。スズキ・メソッドは、音楽を通じた幼児教育運動の創始者・鈴木鎮一しんいち先生の理論で、「耳で聴いて覚える」ことの重要性を方式化したもので、外国語の習得と大いに関連がある



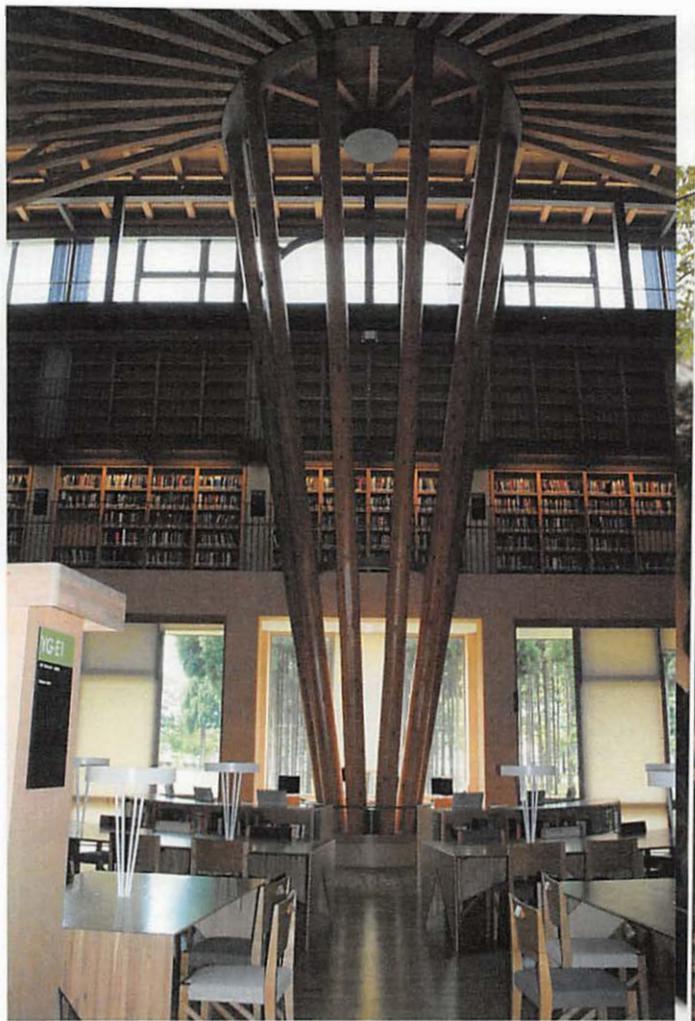
のだと私は感じています。

複言語学習や国際教養などは一部のエリート教育で行えばいいことで、国民全員に求める必要はないのだという議論もあります。小学校に英語教育を導入する際にも同様の議論が噴出しました。しかし、早いうちからの異文化理解や情操教育、そのためのツールとしての外国語の習得や芸術感覚の醸成こそが、これまで日本の教育界が本気で取り組んでこなかった大きな課題なのです。グローバル社会の中で通用する人材を育てていくためには、まず教育界の意識改革が必要のようです。

なぜ新渡戸稲造は

英語で『武士道』を書いたのか

「グローバル化時代」を別の言い方をしますと、「知的基盤社会の時代」だとも言うことができます。世界中がそうしたことを意識し、こぞって英語や外国語の習得に国家的教育方針として取り組んでいる中で、日本だけがいつまでも母語だけの教育を行ってはいけません。せっかくの国益も外国へ流出してしまいます。国際教養は日本を守るためにも必要なのです。加えて、国語力を高めるためにも、外



国語の学習は有効です。例えば、「ジェスチャー」という英語に対して、日本語では「身振り」「手振り」「しぐさ」などの多様な素晴らしい表現が可能です。若い人たちが使わなくなった日本語も、英語と対比させながら伝えていくことはいくらでもできます。英語と日本語が互いに刺激しあつて、言語能力を高めることもできますし、加えて日本の文化を英語で学ぶことが可能です。「ゼロサム」になることはありません。複言語主義の良さは、知的空間を広げるためにも有効なのです。それは、私自身の言語習得に

おける実験からも言えることで、要は、教え方の問題です。

新渡戸稲造、岡倉天心、内村鑑三、嘉納治五郎といった近代日本の草創期を背負った人たちは、まず東京外国語学校の英語科に入学しています。しかも、十歳そこそこの入学です。そこで、お雇い外国人から、英語による英語の授業を受け、新渡戸などは、その後、クラーク博士の札幌農学校へ入学するわけですが、そのときはすでに英語の基礎は出来上がっていたのです。そして、日本人としての自己を尊重しつつ、新渡戸も岡倉も世

界に日本人の精神的土壌や伝統文化を伝えるために英語で「武士道」や「茶の本」といった本を書きました。

ではなぜ、これだけITが発達し、情報網が整備され、英語世界との距離が近くなった時代になりながら、彼らのような英語で発信できる人材が出てこないのか。英語教育、教養教育の大問題だと言わざるを得ません。

幸いにして、本学では、七年前の設立当初から優秀な学生が集まってくれて、理想的な教育ができています。企業の採用担当者も秋田まで足を運んで学生に直接話をしてくれますし、就職・進学率も百パーセントという状況です。これまでの日本企業は、採用した後に自分たちで教育するのだから、どんな学生でもかわらないというスタンスでしたが、それが変化してきています。OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)で日本企業が伸びてきたことは事実でしょうが、それはエコノミック・アニマルでも許された時代のやり方です。今日のように、広く深い本物の教養とコミュニケーション力が必要になればまぐるしく変化するビジネス環境に太刀打ちできなくなっているなかでは、そのスタイルはもはやむずかしい。だからと言って、私は、口先だけで

ラペラと英語が話せる人材を育てたいわけではありません。日本人としてのアイデンティティを深めていける教養がなければ意味がない。これが最も大事なことです。

それを理解してもらうために、毎年、新入生全員に学長から必読書を提示します。新渡戸稲造の『武士道 (The Soul of Japan - An Exposition of Japanese Thought)』が、それです。武士道について勘違いしている人もいますが、ここで書かれているのは、日本的な倫理や礼節が国際社会の中でもいかに奥ゆかしい美德であるかということです。百年以上も前の一八九九年に、新渡戸はそれを堂々と国際社会に英語で訴えたわけです。必読書の他にも、留学中に読む学長推薦図書を挙げています。『万葉秀歌 (上・下)』(斎藤茂吉)、『三酔人経綸問答』(中江兆民)、『菊と刀―日本文化の型』(ルー・ス・ベネディクト)、『文明の生態史観』(梅棹忠夫)、『論文の書き方』(清水幾太郎)、『文明が衰亡するとき』(高坂正堯)の中から二冊以上を読んで感想文を提出しなければなりません。これらの本は私の学長としての考え方を反映したのものであるんです。「こんな古い本を」と否定的に言う学生もいますが、私は妥協し

ません。今はこれらの本を読む意味が分からなくても、後々、必ず「良かった」と思えるはずですよ。日本人に対してだけではありません。留学生たちも日本人の考え方を学ぶことができる優れた本として推薦しています。

## 日本はこれから どうやって生きていくのか

国際教養大学のような構想は、突然思いついたわけではなく、大学教育の世界に長くいるうちに少しずつ蓄積されていったことです。中央教育審議会や教育再生会議などでも改革の必要性を言い続けてきたのですが、これまでは実現できませんでした。教育公務員特例法(教特法)によって国立大学の教員は過保護にされていたからです。一度助手になれば、教授までの道は保証されたも同然でした。組合運動に対しても簡単には罰則を与えられなかった。外国人の学部長や学長も認められていませんでした。ところが、二〇〇四年に国立大学が法人化し、国際教養大学もその年に開学しました。公立大学として最初に法人化しました。改革のできる環境が整ってきたわけです。大学という知的コミュニティには、日本

人も外国人も関係ないはずですし、優秀な研究者よりも、優秀な教育者がより一層必要なんです。

日本がこれからどうやって生き残っていくかと考えると、経済成長だけではなく、教育による人材育成と、それによる文化力の高い国づくりしかないし、そうあってほしいというのが私の願いです。ですから、今までと同じ大学をつくるのでは意味がない、日本の大学内に異文化空間をつくりたい、という私の考え方も秋田県の思いが合致して、私も人生の最後をここに懸けようと思ったわけです。

かつて、カリフォルニア大学サンディエゴ校の大学院で教鞭を執ったことがあります。この経験は、自分にとって大きな試練であつたけれど、大事な教訓も得ました。日本の人文社会科学系の教師で、研究員や客員としてではなく外国で実際に講義を持つ人は決して多くはありません。一年間、みっちり英語で授業をすることは、想像以上のエネルギーを使うものです。なぜならば、外国の学生たちは日本人とは比べ物にならないほどよく勉強します。本気で勉強しますし、質問してきます。そういう学生でなければ単位も取れません。こちらもおのずと真剣にならざるを得ません。そんななか

で私が学んだ最たるものは、学位を取ることよりも、そのために学ぶプロセスを大事にしている大学のあり方でした。日本では、そういう認識が薄いという危機感を、そのときに持ちました。その危機感は、大学というものへの危機感であると同時に、国の将来への危機感でもありました。

インド出身のフェアリード・ザカリアというジャーナリストが、日本が国連の常任安全保障理事国に入れない理由として、外交官が官僚的で、いつもヒエラルキー（階級）を気にして、霞が関ばかりを向いて仕事をしているからだ。そのうえ、英語ができないからだ、と言うわけです。耳の痛い、鋭い指摘です。

### 人生最大の喜びである 「知的世界の広がり」を伝えたい

現在の日本の閉塞<sup>へいそく</sup>状況も、大学教育の変革次第で良い方向へシフトしていけるはずだと思っています。

大学の改革は、高校や義務教育にも変化をもたらすものであってほしいと願っています。本来、高校の三年間はクラブ活動や授業にしっかり集中すべきです。その後に受験勉強をする時期があればいい

のです。そのためには、大学の入学時期も九月入学がよいと思います。外国では、九月入学のところが多いわけですから、留学先で勉強するにも都合がいいんです。桜の季節に入学する日本のな情緒も魅力ではありますが、若々しい高校三年間のうちに無理やり大学受験のための勉強をしなければならぬのは、長い目で見れば、プラスにはならないように思います。

私たちは、総合点数だけで学生を判断するのではなく、合格ラインを下回っていても、英語だけは抜群に優れている受験者や、文系にもかかわらず数学に関しては目を見張るものがあるなど、「これは」と思う人たちは、科目等履修生という特別な立場で一年間の暫定入学を認めます。そこで平均以上の成績を残せば、二年目には正規入学となります。過去にこの制度で正規入学できなかった学生は一人もいません。

ホームステイによる高校生の海外留学も奨励しています。高校生留学特別選抜枠を設け、六月に帰国した高校生が八月に入学試験を受け、九月から入学、というケースもあります。これによって、優秀な高校生に学ぶ場が確保されます。こうしたことも九月入学を推進したい理由



なのです。三月末に入学が決定した後に学生が海外体験や社会体験をして九月に入学してくるイギリスの「ギャップ・イヤー」の発想が今後の日本にも必要だと考え、本学ではすでに実施しています。

こうした地道な活動を積み重ねていくことで、人材を育成していくしかないんです。中国、韓国、台湾、シンガポールなどアジアに限って見ても、人材育成に関しては非常に力を入れていきます。今のままでは日本のアジアの中での存在感は、ますます薄くなっていくのではないかと心配しています。しかし、日本人個々の潜在的なポテンシャルは、本来、非常に高いものです。

問題は、それをパワーとして發揮する手段がないことなんです。その手段の最たるものが英語なんです。私の体験から、強くそう感じるわけです。

先日訪れたモンゴルで、政府関係者にこう言われました。「資源はたくさんあるから、日本の企業にはぜひ来てほしいんだけど、なかなか来てくれないので中国の企業が持つていつてしまうんです」と。カナダやオーストラリアでも同様の声を聞きました。世界は、まだまだ日本に期待しているんです、本当のとは

ろは。そうすると、なおのこと日本の針路や外交のあり方を問い直さないとけません。

そういう意味で、いまだに「鎖国」しているのが日本です。日本の教育に必要なのは、改革ではなく、「開国」なのかもしれません。

私は、自分にとって何が喜びかと考えると、ヴァイオリンの演奏も、登山もその一つだけれど、最大の喜びは、外国語の習得による「知的世界の広がり」なんです。この満足感は何ものにも替えがた

いものです。私自身は英語、フランス語、中国語を使いますが、世界が知的に、もう一つ、二つ、三つ、と広がっていくことを経験すると、この喜びを若い人たちにも実感してほしいと思うわけです。英語ができる、それを使っているようなことができる、という利便性だけでなく、自

分の世界が開かれていく充実感。それを未経験の人にどうやって分かってもらうかと苦心するのが、本来の教育者です。七十四歳になった今の私の使命もそこにあると思っています。



中嶋 嶺雄 なかじま・みねお

国際教養大学学長・同大学理事長。国際社会学者。1936年（昭和11）長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、アジア太平洋大学交流機構国際事務総長、財団法人大学セミナー・ハウス理事長、文部科学省中央教育審議会委員、内閣教育再生会議有識者委員などを歴任。その間、オーストリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院などで教鞭を執る。2004年（平成16）国際教養大学開学に伴い理事長・学長となる。著書は『「全球（グローバル）教育論』『音楽は生きる力』（西村書店）、『21世紀の大学』（論創社）、『国際関係論』（中公新書）、『北京烈烈（上・下）』（筑摩書房・サントリー学芸賞受賞）など多数。